

第8回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

◇実施日時	2023 年 11 月 7 日（火）19 時～21 時
◇方法	ZOOM によるオンライン開催
◇参加者数	33 名
◇内容	学習指導案の相互検討①

【ルーム1】ファシリテーター：大西浩明（奈良教育大学）

1）真柴唱子さん（アドベンチャーワールド）

中学校1年 社会科・総合的な学習の時間「世界各地の人々の生活と環境」

世界の人々の暮らしと動物の関係から多様性を考え、共生に向けた提案ができるように
中1社会の「世界各地の人々の生活と環境」を手がかりに、生活や環境の多様性、それらの相互依存
関係について学ぶ

→ そこに動物を入れ、動物も環境に合わせて生きていることについて考える
グループごとに世界各地の地理・民族・言語・宗教・動物の情報を調べる
衣食住に触れられる機会（民族衣装を着る、講演会、調理体験など）
動物園に行って体験 野生動物について知る
中間発表 絵本製作 → 読み聞かせ

意見交流から

- ・動物そのものに興味を持たない子どもが増えているように感じる。
（いつでも動物の動画などが観られるからかも） → 提案されたこういう学びができるといい。
- ・そういう立場の方に入ってもらって動物からつながりを考える学習は、子どもにとっても魅力的。
- ・社会科では7～8時間扱いなので、プラス10～12時間の総合でできるのでは。
教科横断的に考えればきっと実現可能だと思う。
- ・人々の暮らしとのつながりという視点に、動物が入れば新たな社会科の学習になる。
- ・せっかく動物園に行くならば、「生で見ないと感じられないこと」に焦点を絞った方が。

2）高良直人先生（那覇市立松島中学校）

中学校2年 総合的な学習の時間「首里（すい）ま〜い」

身近な首里城付近には、沖縄特有の貴重な文化遺産や自然が数多くある
それらに目を向け、様々な課題に気づき、地域社会のあり方や自分の生き方について考えさせたい
地域のフィールドワーク（事前・事後学習） グループごとにルートマップを作成
「首里城クイズ」 龍潭池に外来種が多くいる問題
中学生が作成するガイドブック、パンフレット
「こんなにすごいものが近くにある！」という驚き

意見交流から

- ・松島中は沖縄県のSDGs研究指定校なので、学校挙げてのESDの取組になっている。
地域から題材を見つけ、先生が変わっても継続できる学びにしている。
- ・フィールドワークに行くときに気を付けていることは？

→ フィールドワークでは、何を感じ、何を学ぶかは生徒に任せている。

そこから次の学習に広がると思う。視野を広げるフィールドワークだと思っている。

- ・外来種の住む池へ行って生き物調査、パンフレットを配布。 → 観光ガイド
- ・子どもたちの持った課題意識から何かしらのアクションがいろいろ出てくれば面白い。

3) 屋良真弓先生（南風原町立南風原小学校）

小学校6年 社会科「平和で豊かなくらしをめざして」

戦後復興 米軍統治下での沖縄の様子を組み込んでいきたい（知らない児童が多い）

「花ブロック」 基地建設に使用されたコンクリートブロック製造の技術を生かす

これまで算数や国語の授業で「花ブロック」を扱ってきた

沖縄の人たちの苦悩やたくましさ、したたかさに気づかせたい

その時代を生きてきた人たちの生の声を聞かせたい

最後に「豊かな社会」について考えさせたい

意見交流から

- ・発表で終わるのではなく、沖縄の人々の思いや願いにフォーカスして、未来の沖縄について考えるま
とめにしたい。
- ・教科書にはない身近な話になると、子どもの学びが一気に自分事化される。
- ・沖縄の戦後史は、他の地域ではできない。米軍統治下の状況でどんなことがあって、人々がどんな思
いで、どのように生き抜いてきたのかということについて、丁寧に扱うべきだと思う。
- ・SDGs に敏感な子どもだから、「豊かな沖縄」を考える際、どんな課題があるのかを SDGs の視点で考
えることによって、多様な豊かさについての考えが出てくるのではないかな。

4) 太田馨先生（山辺町立山辺小学校） 小学校2年 生活科

「だいすき！山辺町！ ～まちたんけんでぼくたち・わたしたちの山辺町はっけん！～」

今年転任したばかりで、自分も地域のことをまだよく分かっていない

山辺町のことをもっと知って、もっと好きになってほしい

校区を4つに分けて行ってみよう 新たな発見、共有、まとめ

→ もっと知りたいこと（学年で18か所）

発表（1年生に） 町の人にお礼

もっと好きになるにはどうしたらいいか

意見交流から

- ・気付きの質を高めるために工夫したことは？
→ 校区を4つに分けると、それぞれの地域の特徴が見えてくる。
- ・先生が全部知っている必要はない。子どもと一緒に町のことを知っていけばよいのでは。
その方が教師もワクワクできる。
- ・教師が楽しんでいる様子を子どもに見せていると、自然と子どもも楽しくなってくる。
- ・子どものモチベーションがずっと続くようなキーワードがあった方が。
(ひみつ、すてき、じまん、たからもの など)
- ・生活科で同じ活動を繰り返し行う意味。 気付きの質を高める意味でもある。

【ルーム2】ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 井上岳海さん（学校教育マネジメントコース ESD マネジメント領域）

中学校1年 社会科「日本列島の誕生と大陸との交流」

国ってなんだろう？昔から日本という国はあったのか？

縄文時代：温暖化による縄文海進により日本列島が大陸からはなれる

弥生時代：大陸より稲作が伝えられる（稲作技術を持ったグループの漂着？）

稲作の影響

同じところに住むことができる、人口増加 → 環濠集落

争いが起こる

・村を大きくしたい、米を奪いたい

国の成立、リーダーの出現（富をもつ人、特別な力を持つ人）

→ 古墳の大型化と豊かな副葬品

現在につながるものや文化（稲作、仏教、鉄、漢字など）

なぜ、1500年以上の前のものが残っているのだろう

意見交流から

・本単元構想案の商業ポイント。

時代の変化を政治だけではなく、気候の変化も要因であったことを伝えること。

・学習が教科書内で終始している。具体物や実物を用意して、生徒の学習意欲を喚起する必要がある。写真だけでなく、「本物」を教室に持ち込む。

・調べる学習では資料集や教科書だけでなく、専門家を招聘してインタビューした方がいいだろう。

・教えなければならないことを確実に指導しつつ、ESDをつないでいく。ESDで育てたい資質・能力と教科の学習との関連を考えること。

・同じペースで進める必要はない。おもしろいと思うところは時間をかけてよい。

2) 上田朋幸先生（長浜市立びわ中学校）

中学校2年 総合的な学習の時間「ヨシ行けどんどん作戦」

・一年をかけて取り組む全校行事

・育てたヨシ苗を琵琶湖に植栽する。21年目の取組

・いつ、何をするのかという活動自体はよく分かっている。しかし、なぜこれをするようになったのか、当時の人々の思いはわからない。琵琶湖の水質改善との関係もよくわかっていない。

形骸化しつつある。

・年間を通した取り組み

学校で自作した読み物教材で学ぶ

5月～9月 苗の育成

9月 ヨシ苗の植栽 ヨシの生育状況の観察

2月 育ったヨシを刈り取り、次の苗を育てる

取組の背景

20年以上前、琵琶湖湖岸道路の建設、圃場整備などにより、ヨシ原が荒れた。琵琶湖の水質悪化を背景に、中学校として何かしたいというPTAからの要望があった。地元の漁師からは、魚が獲れなくなっているとの情報もあった。

→ 学校と地域が連携して何かできないか というのがスタートだと聞いている。

意見交流から

- ・地域学習のゴールで想定している生徒の姿…自分のまちに誇りを持ち、好きになってほしい。
- ・地域は行動を起こせる場である。多世代の方々との協働・交流の場として捉えること。
- ・地域の方々との交流することは自尊感情を得やすい環境である。20年以上続いている取組ということは、その地域で中学校時代を過ごした方は、同じような活動による「思い出」を共有しており、地域アイデンティティを醸成する取組になっているものと思われる。
- ・形骸化をさけるために、プラスアルファの活動を生徒会・地域で相談する。
- ・生き物調査を行い、データを蓄積することは意味がある。
- ・琵琶湖博物館などの専門機関と連携することで、新たな企画が生まれているのではないかな。
- ・取り組みの成果として琵琶湖の水質改善に役立っていることがわかるには、専門家との連携が必要。

3) 石山葉月先生（山形県立高畠高等学校） 高等学校1年 言語文化『羅生門』（芥川龍之介）

- ・極限状態の人間の心理について。悪を行って生きるか、善のままで死ぬか。
- ・モラルジレンマ そこまで生徒が自分事化できるかが問題
- ・そこから、自分が生きる上で本当に大切にしているものに気づかせたい。自分が感じている「幸福の状態」を見つめさせたい。
- ・現在は、極限状態に陥る前に「福祉」がある。福祉に関するゲストティーチャーに講演を依頼する。

意見交流から

- ・極限状態（生きるか死ぬか）に陥った下人の利己心を認めるか認めないか。
- ・あなたにとって幸せな状態を問う 価値明確化シートに何が書かれるだろうか。自分の中で本当に大切だと思っている価値を明確にすることは、高校生にとって意味がある。単元の前後でどのように変化するか比較して、変化の原因や変化しなかった原因を突き詰めさせることも意味がある。ただし、生徒が本当のことを記すかどうかは問題だ。
- ・福祉は、金銭的支援だけではない。その人が何をよりどころにすることで生きていけるかを想定し、支援することが大切だ。
- ・福祉行政のゲストティーチャーの講演を、クリティカルに捉えさせる。
共通の幸せに向かわせるための行政による福祉（社会保障）は、どれだけ行う必要があるのか。
セーフティネットがあることの重要性。福祉行政の成功例と失敗例。福祉行政の課題：人手不足など。
- ・福祉行政に関わる講演を位置づけるなら、国語科だけでなく国語科・総合的な学習にした方がいいのではないかな。

【ルーム3】ファシリテーター：河野晋也（大分大学）

1) 竹田光陽先生（生駒市立生駒東小学校）

子どもたちが世界で起こっている様々な出来事を、当事者意識をもって捉えることができていないのではないかなという課題意識から、貧困の問題に着目させた実践。

子どもたちにとって心理的に遠い問題を扱うため、現地に住んだ経験のある人や貧困の問題に詳しい人の視点で感じたことを聞かせてもらうこともよい視点づくりになるとの意見が出された。

また自分たちにできることを考える場面では、「～してあげる」というスタンスで関わらせては本来の目的とは異なってくる。

現地の様子を知ること、そのうえで現地の子どもたちと自分たちとの共通点に目を向けること、また物的な豊かさにとらわれることなく、日本では見られなくなった豊かさ、交流した国にある豊かさに目を向け、子どもたちが学ばせてもらうことも一つの取組のアイデアではないかという意見が出された。

2) 田中紀裕先生（長浜市立湯田小学校）

学区内の川の様子について、どのような生き物がいるのか、どれくらいきれいな川なのかを調べ、どのように川と関わって生きていくべきか、パンフレットにまとめていく学習。

特に単元末にどのような取組をさせるべきかが課題。

また川と子どもとのかかわりがどの程度深くあるのか、その中で子どもたちがどのように探究課題を見出していくのかという点について、検討していく必要があるとの意見が出された。

アドバイスとして時間軸で川の様子を見つめさせたり、どのような目的で、誰に対してパンフレットを作成したりするのかを子どもたちと検討することが必要ではないかという意見が出された。

3) 長嶺有希さん（特別支援教育専修3回生）

中学校第2学年の総合的な学習の時間／家庭科の授業が提案された。

相対的貧困というデリケートな話題を扱うことの難しさ、問題の複雑さなどについて、参加者から意見が出された。

特に意見が出されたのは、食事から得られる幸せは満腹感だけではなく、家族と一緒に食事を囲む団らんや人との関わりだということである。

例えば子ども食堂を運営されている人が、「子ども食堂という名称を前面に出すことで本当に支援が必要な子どもが来づらくなる」と考えて運営されていることを紹介すること、子どもと人との関わり合う場としても大切にされていることを紹介することが、よい導入となるのではないかと意見が出された。